空間・社会・地理思想 7号 90-117頁，2002年
Space, Society and Geographical Thought

公共空間は終焉したか？

―民衆公園，大衆の定義とデモクラシー―

ドン・ミッチェル*
（浜谷 正人** 監訳）

Don MITCHELL
The end of public space?
People's park, definitions of the public, and democracy.
Annals of the Association of American Geographers, 85, pp.108-133, 1995***

公共空間の本質をめぐる闘争：バレーボール暴動

1991 年 8 月 1 日の朝，カリフォルニア大学（UC）とバークレー市とが共同で計画した民衆公園開発を阻止しようとした約 20 人の活動家たちが，ブルドーザーが 2 面の砂地のバレーボールコート用に草や土を除去した時に逮捕された（第 1 図）。その日の夕方まで，警官と公園の「防御者たち」は，民衆公園への働き掛けが進められるべきかどうかをめぐって路上で戦い続けた。この公園の周辺で起こった暴動は，1 週間のほとんどの間続いた。警官は繰返し木製の淡褐色の弾丸を群衆の中に発射し，警官の蛮行を記載したレポートが広く配布された。（それには，バークレー警察監視委員会のメンバーによる，目撃された殴打事件も含まれていた。）しかし，防御者たちは暴動を止めようとはせず，石や小便入りのビンを警官に投げつけた[1]。

（増員された警察官とともに入ってきた）このブルドーザーは，UC と市との協定の実行の第一歩を示していた。その協定とは，多くの人々が望んでいたように，民衆公園，つまり市当局と UC・地方活動家・商人・ホームレスの人々の間で 20 年以上に渡って続けられた紛争の場所を，最終的に処分しようというものであった。この民衆公園は，公園の開発を阻止しようとした人々にとって，この市における最後の真に公共的な空間の 1 つであり，民衆公園防御者連合がそう呼んだように，「この国で唯一の解放地帯」を代表していた（Rivlin 1991a: 3）。大学によるものであろうと市当局によるものであろうと，この土地を開発しようとするどんな試みも，この公園の公共的な特質に対する脅威と見なされたのである。

確かに，民衆公園の公共的な特性は常に問題視されてきた。この土地は UC によって所有されているが，大学はそれを 1967 年に，表向きは寄宿舎を立てるという目的のために，土地収用権に基づいて取得していた。寄宿舎を建設する資金が不足していたが，直に大学はその土地に建っていた住宅を取り壊した。次の 2 年間，この土地は空き地のままにされ，泥だらけの駐車場として利用された。1969 年に，学生とコミュニティの活動家・地元商人から成る連合体が大学に挑戦して，この土地に対する要求を突きつけた。彼らの目的は，高度に都市化された地域のど真ん中に，利用者によって管理された公園を造り，それを厳しく規制された都市環境から閉め出された人々のための天国にするということだった（Mitchell 1992a）。UC はこのような民衆公園の創設運動に対抗して，公園の周りに柵を

*　コロラド大学
**　富山大学
***　図・表・写真は編集の都合上，文末にまとめて掲載した

巡らし，そこを利用しようとしている人々を排除しようとした。活動家たちは大衆抗議で対抗し，それはたちまち，多くの人々にとってはバークレーを象徴する事件となった 1969 年暴動へと発展した。公園の防御者たちは，強力な政府諸機関や警察権力，そして都市構造に対する民間資本の拡張などに抵抗する正当性を力強く主張した（Mitchell 1992a）（第 2 図）。そして，ある程度まで彼らは勝利を得た。警察と大学とは，最終的に敗北し [2]，それ以降は，民衆公園として知られる一片の土地に対する彼らの権力は極めて弱いものであった。

にもかかわらず，大学はこの土地の所有権を維持し，しばしば，それを直にも「改良する」という計画を公表し続けた。政治的な現実は別であった。民衆公園は活動家たちにとって，政治的権力の重要な象徴であり（Mitchell 1992a），彼らはその公園を元々思い描いたようなものとして，つまり支配社会から排除された人々のための天国（Deutsche 1990 を参照されたい），政治的活動の場所，大学の計画家と都市住民との間に展開中の闘争の象徴的な要塞（Lyford 1982）として維持することができた。しかし,1989 年になって大学は，政治的な環境の変化，つまり 1980 年代を通じて，バークレー市議会が温和になったことや，UC の学生の活動主義の緩和などに反映されている変化を感じとって，最終的にはこの土地を一層強固に管理する政治的力量を保持していると判断した。バークレー市議会も公園の活動家たちも，この公園の完全な除去を大目にみようとはしなかったけれども，大学は公園の一部をコミュニティの利用に留保しながら，学生の利用するレクリエーション施設を建設する計画のために市当局と折衝に入った。これらの折衝を通じて，UC は民衆公園を公園として維持する意図を十分にもっている点を強調した。しかし，今やそれは，学生や中産階級の住民，つまり大学の主張によれば，民衆公園が「下等な麻薬の売人や路上生活者・ホームレスたち」（Lynch 1991a: A12）の天国となった時に排除された人たちのための余地を造る目的で，相応しくない活動，大学の言葉を使えば「犯罪的な要素」（Boudreau 1991: A3）が除去されることになる公園である。

この目的を達成するために，市当局と UC とは無害とも思われる開発計画に同意した（第 3 図）。UC は公園の東と西の端を，コミュニティの利用のために市に 5 年間に渡って年 1 ドルで（「見直しを原則として」）貸すことに同意した。一方，公園の中央部分（それは広い草地で，多くのホームレスの人々が眠ったり，伝統的にコンサートや政治組織活動が行われる場所であった）（第 4 図）は，バレーボールのコートや通路・公共休憩室・防犯灯などで満たされたリクリエーション地区に変えられることになった。この借地と交換に，市は「この土地への法律適用の主要な責任」を負うだろう。また，この計画は，市と大学とが共同で，「大いに望まれている停戦をもたらし，この場所を誰もが享受できる公園とする」（Kahn 1991a:28）ことを目指した「利用の方法と評価に関する助言委員会」を設立することも求めていた。これらの開発は控え目なものであったが，それらはもっと大きな変化を予兆しているという点で皆の意見は一致していた。郊外のコントラ・コスタ・タイムズ紙（Boudreau 1991: A3）がコメントしているように，「確かに，この 2 つは似たような狭小な未利用地ではあっても，決して同じではないだろう。そして，その分，ある時代が終わりつつあるのだ」。

20 年以上にも及んだ暴動と議論・論争・無視・約束違反などの後，市と UC との協定成立によって画期されるこの時代の終焉は，バークレー市と湾岸地域に住む多くの人々にとっては余りに遅すぎたように思われる。主流に属する全国紙や地方紙だけでなく市政府や大学執行部にいる，この公園の批判者たちにとっても，ここを改良することは共通の課題であった。「公園の近くの何人かの人々や学生たちにとって，大学に所有されている民衆公園は不法占居者や麻薬販売人などが蔓延った場所に思われた」（Boudreau 1991: A3）（第 5 図）。UC のコミュニティ交渉担当者の Milton Fujii によると，「公園の利用は不十分である。人々のほんの一部しか公園を利用しておらず，彼らはコミュニティを代表していない」（New York Times 1991a: 1. 39）。同様に，UC の広報担当者，Jesus Mena は次のように断言した。「我々はホームレスを追い出すつもりはない。公園が変っても，彼らはそこにいるだろう。だだし，この公園に向かって寄ってきた犯罪的要素なしにである」（Boudreau 1991:A3）。これらの批判者たちにとって，公園の目立った無秩序は，犯罪を誘起し，正統で「代表的な利用者」を排除するものに思われた。不法な行動は，公園のみすぼらしい外観と相まって，

民衆公園が「相応しい大衆」のために改良され定義し直されなければならない場所であることを確信させた。

しかしながら，ＵＣと市の開発計画の反対者たちにとっては，民衆公園は，サンフランシスコ湾岸地域では，ホームレスの人々が比較的煩わされずに生活できる 2，3 の地域の 1 つであった（Kahn 1991a: 2）。彼らにとって，民衆公園はそうあるべきものとして，つまり真の公共空間として役立っていたのである。それは直接的な相互交流を促進する政治的な場所であり，政府の権力が食い止められ得る場所であった。活動家たちは，この協定が，何年もかかって設営してきた公園の諸設備のいくつか，例えば草のはえた集会地区や自由演説の台，（衣服を脱いだり着替えたりするための）フリー・ボックス（第 3 図と 4 図参照）などを危うくすると感じた。彼らはこれらなしでは，民衆公園は存在しないも同然だと感じたのである。1969 年の公園創設者の一人である Michael Delacour によれば，民衆公園を守ることは，「やはり，望むことを何でも言うために，自由な演説を保証し，自由に入れる場所を人々に提供するための運動だった」（Lynch and Dietz 1991:A20）。公園のこの側面，つまり人々が「自由に入れる」という役割は，ホームレスの問題と複雑に絡み合っていた。UC と市との計画に反対する人々にとって，民衆公園はその発端からずっと，ホームレスや他の路上生活者の避難所とみなされてきた。活動家たちは，バレーボールコートの建設がこの公園の伝統的な役割の中心を破壊するに違いないことを恐れた。彼らは，ホームレスの人々を排除してしまうことになるような民衆公園の変化は，公共空間の浸食に等しいと考えたのである。

公園に住むホームレスの住人たちも同じ意見だった。公園で生活するホームレスの女性，Virginia は，UC と市の計画について質問してきたリポーターに答えて，公園で生活する多くのホームレスと公園を守ろうとする活動家たちの不安を代弁した。「これがどういうことを引き起こすか，私と同じようにあなたもご存知でしょう。彼らがここに入れる人間を学生証をもった大学生に制限し始めるのは時間の問題でしょう」。リポーターが彼女に，大学側はホームレスを移動させないと約束したことを指摘したとき，Virginia は次のように返答した。「あなたはそれを言葉どおりの意味で受けとっている。国家的な記念碑が取り壊されつつあるのですよ」（Rivlin 1991a: 27）。オークランドホームレス組合の活動家である Andrew Jackson は，民衆公園をめぐる闘争をより大きな文脈に位置づけた。「奴らは夢を壊しつつある。…わたしの記憶するかぎり，公園は中に入るためのものであったはずだ。そこはすべての人々のための場所であって，何人かの大学生がバレーボールをするためだけの場所，あるいは白人だけの場所ではない。そこは人々が疲れたとき横になったり眠ったりする場所であった」（前掲引用書）。そして，公園で生活するホームレスの男性，Duane にとって 1991 年の暴動は，とりわけホームレスの人々の権利を獲得するためのものであった。「この暴動はホームレスの人々と失業者をめぐるものであり，そして圧制に対する闘争である」（Koopman 1991: A13）。

活動家たちは，この公園の変化は長い間湾岸地域における「対抗文化」の中心地としての役割を担ってきた，公園付近に位置するテレグラフ・アヴェニュー Telegraph Avenue の変化と関連していると考えた。彼らは，この公園が周辺近隣地区の全面的な変容の橋頭堡となるのを恐れた。市と UC の協定が公表されたあとすぐ，ホームレス活動家である Curtis Bray はコメントして，「大学は，自分たちはホームレスの人々の敵ではないと言っているが」と前置きして次のように述べた。

> しかし，公園に対してつくられつつあるすべての規則と規制は，ホームレスのコミュニティにのみ影響を与え，他の人々には影響しないものである。…彼らは，自分たちの学生が日常生活の中で，哀れさや貧困といったものに出くわすのを望んでいない。いったん，彼らがセメントのコートを手にしたなら，彼らはホームレスの人々をできるかぎり近づけないよう望み続けるだろう（Kahn 1991a: 2, 28）。

Bray は，この民衆公園の協定は，ほんの出発点に過ぎないだろうと予言した。「いったん，民衆公園が立入禁止になるやいなや，ホームレスは [テレグラフ]アヴェニューへ移動しつつある。いずれ大学当局は，今度はアヴェニューが問題であると言うだろう」（同上書）。もう一人の公園創設者であり，バークレーにあるワールド・ビート・ダンスクラブの所有者である David Nadle はこれに同意した。彼は市と大学との協定を，空間の全面的な商品化と管理へと向かう最終的な動き

だと非難した。「民間資本界はバークレーを手に入れようとしている。公園はその闘争の中心である。なぜなら，この公園は民間資本の拡張をめぐる 22 年間の闘争を象徴しているからである」。バークレーは「ヤッピー化」してきた，と彼は苦情を述べた（Kahn 1991b: 30）。

テレグラフ・アヴェニューには，1969 年の民衆公園暴動以後の数年間に一連の変化がみられた。湾岸地域の 10 代層に人気のあるデートの場所であるテレグラフ・アヴェニューと民衆公園との交差点では，1980 年代後半を通じていくつかの路上騒乱が発生した。例えば 1969 年暴動の第 20 回記念日は，石が投げられたり窓が割られたりした事件によって特徴付けられた（Los Angeles Times 1989a: 13; New York Times 1989a:1. 26）。しかし，1980 年代には，このアヴェニューはなお活気あるショッピング街であり，金持ちの学生や若い専門職業家たちの要求を満たし続けていた。1980 年代半ばまでには，企業組織の小売店が地元自営業者を犠牲にして成長した[3]。大規模なバーとレストランが，古本屋やコーヒーハウス，学生相手の食堂などと競争し始めた。非常に安上がりな生活をする郊外の中産階級に人気のあるコーヒーバーが，もっと前の時代を特色付けた小さなレストランや，いわゆる「ヘッド」ショップにとって代わった。落書きやポスターで覆われた壁の一部は，パステルカラーと上品なネオン灯に代えられた。

その上，1980 年代の好景気時代が 1990 年代初頭に破綻に向かうと，サウスキャンパスの多くの学生たちには，路上で演技したり，あるいは道路で活動したりする時間や忍耐力がほとんどなくなった。公園もテレグラフ・アヴェニューも，これらの政治的・経済的な環境の変化を反映した。サンフランシスコ・クロニクル紙は次のように書いている（Lynch and Dietz 1991: A1）。「かつて抗議行動がジョッギングと同じほど日常的だった都市において，暴動に対する寛容がほとんどない」。公園の活動家である Michael Delacour が観察しているように，「ここの学生たちは変ってきた。彼らは時代が厳しいことを知っていて，生き延びたがっているんだ」（Lynch and Dietz 1991: A20）。民衆公園のような空間を可能にさせていた活動やコミュニテイ参加のための時間は限られていた[4]。多くの学生たちは，民衆公園の「未利用の土地」を避けてさえいた。

1990 年代の初頭，何店かのチェーンストアーがテレグラフ・アヴェニューから撤退していき（第 5 図），荒廃の雰囲気がこのビジネス街区に充満した（May 1993: 6）。アヴェニューの多くの商人たちはこの衰退の原因を，民衆公園によって惹起された継続的な災難に帰したが，テレグラフ・アヴェニュー商人組合の事務員たちは，暴動やホームレスの人々といった事実よりも，この公園のイメージの方がビジネスに一層脅威的であることを認めた。ある 1 人の事務員は，犯罪はこの都市のどこよりも公園の中や周辺では流行っていないと断言した後で，知覚像の方が現実よりもずっと重要であると直に付け加えた。「もし，大多数の人々が，そこは物騒で不潔であると思っているとしたら，なぜ彼らはそう思うのだろうか。それは何らかの事実に基づいているのだろうか」（Kahn 1991a: 28）。この事務員にとって，そのような知覚は，商人たちがこの近隣地区の正統な大衆と考えている人達，つまり買物客や学生・家に住んでいる人々などの通行量の減少に現れているように思えた。

これらの知覚像を逆転させようとして，市と大学は最終的に，1991 年の 8 月初めに暴力に訴えた。公園の抗議者たちは，同様に対抗した（第 6 図）。その週の新聞は，路上の小競り合い，重装備警官による戦術的行進，多くの抗議者たちによって感じられた怒りの記事で満たされた。警察は見物人たちを殴ったり，公園のホームレスの住民たちを手荒く扱ったり，無用な木製の淡褐色の弾丸を使ったことによって責められた。抗議者たちは，石やビンを投げ，窓を割り，道路で火を焚いた。8 月 6 日までに，警官の残忍行為に対する 8 通の公的な不平が警察監視委員会に提出され，また 6 通が警察署それ自体に提出された。警察監視委員会のメンバーは，50 通の警官の悪態への申し立てを受け取り，また同委員会は，他の 25 の不平の叫びを受け取った。加えて，無数の警官がこの暴動中に怪我をした（Rivlin 1991b: 18）。

「我々は交渉を申し入れた」とクラブオーナーの David Nadle は主張した。「しかし，これが我々の得たものだ。力づくで彼らはこの公園の一部を徴用したのだ」。そこは，自由演説地区，舞台，奉仕施設，フリーボックスなどを備えた中心部であった（Kahn 1991c: 11）。この占拠は成功した。暴動は土曜日の夜までにはほぼ鎮静化し，公園防御者たちは敗北を認めた。8 月 4

日に公園で開かれた抗議者の大会の時，公園の創立者で活動家の Michael Delacour は明言した。「元々，我々はこの公園で何が起こるかの選択権はいずれにしろ持っていなかったのだ」（Auchard 1991:23）。

4 日後，最初のバレーボールの試合が民衆公園で開かれた。大学事務局は，1 人の防御者がかつて「支配力，他の人々自身にためになる解決策」（New York Times 1991c: A8）と呼んだものを確立しようとして，もし公園でバレーボールをする気があるならということで，学生の被雇用者を仕事から解放した。バークレーの若者・住宅斡旋係の被雇用者である選手の 1 人は，サンフランシスコ・クロニクル紙に，「最初僕は，『よし，バレーボールをやりに行こう』と思った。しかし，そこで私は，もっと多くの関係者がいることに気付き，少し怖くなった。でも私はここに来た。なぜなら，私はこの出来事を見たかったし，私の支援を見せたかったからだ。民衆公園は変わる必要がある。私はかつて一度だけここを訪れたことがある。ほとんどの人々はこの場所は安全ではないと考えている」（Lynch 1991c: A20）。その日の夕方午後 7 時，前の週の土曜日以来「暴動」がないにもかかわらず，警察は 16 人を，大学が「オープンスペース」としてそのままにしておく計画だと主張していた公園が閉められた後に侵入した罪で捕まえた。

思い描かれる公共空間

このバークレーの住宅斡旋係に勤める被雇用者は正しかった。バレーボールよりも民衆公園が大事な人の方がずっと多かったのである。公共空間の本質と目的についての 2 つの対立する，そして多分両立し得ないと思われるイデオロギー的見方は，ホームレスの人々や活動家・商人の世界と，市と大学の事務員たちの世界に明瞭にみられるが，それは彼らが民衆公園をめぐる長期間にわたる，時には暴力的な闘争を説明しようとした際に鮮明化した。この公園を利用している活動家たちとホームレスの人々は，自由な交流と，権力的な制度による強制力のないことで特徴付けられる空間という見方を推進した。彼らにとって公共空間とは，その中で政治運動が組織され，より広範な地域へと拡張できる，制約のない空間であった（Mitchell 1992a；Smith 1992a；1993）。大学の代表者たち（言うまでもなく，多くの都市計画家たち）の見方は，これと全く違っていた。彼らの公共空間の見方は，リクリエーションや催し事のための，そこに入ることを**＜許可される＞**に相応しい人々の利用に供されるオープンスペースという見方であった。こうして公共空間は，ある 1 つの管理され秩序付けられた**＜避難所＞**であり，相応しい行動をする大衆が，都市の演劇を体験する場所となる。これらの見方の最初のものでは，公共空間は政治的行為者たちによって占有され造り変えられる。その空間は徹底的に政治化される。そしてそれは無秩序（それには常習犯的な政治運動も含まれる）の危険にも，その機能にとって中心的なものとして耐える。第 2 の見方では，公共空間は計画され秩序付けられ安全なものである。この空間の利用者は，快適な感じを抱かされねばならず，見苦しいホームレスの人々あるいは御呼びでない政治的活動によって追い出されるべきではない。勿論，これらの見方はバークレーにユニークなものではない。それらは実際，現代都市の公共空間についての優勢な見方である[5]。

公共空間のこれら 2 つの見方は，ルフェーヴルの**＜表象の空間＞**（すなわち占有され，生きられた空間，利用されている空間）と**＜空間の表象＞**（すなわち計画され，管理され，秩序づけられた空間）との区別と多かれ少なかれ整合する[6]。常にそうだと言うわけではないが，公共空間はしばしば空間の表象に由来している。例えば，それは裁判所広場，記念広場，公共公園，歩行者専用買物地区のようなものである（Harvey 1993；Hershkovitz 1993）。しかし，人々がこれらの空間を使用するにつれて，それらはまた表象の空間にもなり，利用に充用されるようになる。しかしながら，この標準的な年代順配列は，民衆公園の場合には逆だった。それは表象の空間として，すなわち最初から占拠され占有された空間として始まったのである。公共空間の起源が何であろうと，その「公共物」としての地位は，一方で秩序と管理を求める人々によって，そして他方では対抗的な政治活動や直接的な相互交流のための場所を求める人々によって，それぞれ支持されてきた見方の絶えざる対立を通して生み出され維持されている。

しかし，公共空間はまた，そして非常に重要なことに，**＜表象のための空間＞**でもある。即ち公共空間は，

政治運動が自らを可視化できる空間を縄張りすることが可能な場所である。公共空間において政治的諸組織は，自らをより多くの人々に見せることができる。公然と空間を要求したり，公共空間を創り出すことによって，社会的諸集団は自らが公共的なものとなる。例えば，ホームレスの人々は，公共空間においてのみ，自分たちを「大衆」の正統な部分であると主張することができるのである。ホームレスの人々や，周辺化された集団が社会に姿を現さないままでいる限り，彼らは一般大衆の正統な一員に加えられることはない。そして，この意味で公共空間は，民主的なポリティクスの機能にとって絶対に必要である（Fraser 1990）。公共空間は，なにがその空間を構成しているか（例えば，秩序と管理か，それとも自由で多分危険であるような相互交流か），そして誰が「大衆」を構成しているのかということについての考えが競合した所産である。もちろん，これらはただ単にイデオロギーの問題ではない。これらはむしろ政治的活動を可能にさせる空間そのものについての問題である。それゆえに民衆公園をめぐる闘争がなぜ暴力へと転化したか，人々はなぜこれらのような空間について，そんなに熱くなれるのかを理解するためには，我々は政治的活動を駆り立てる規範的な理念や，民主主義社会で我々が「公共的」と呼んでいる空間の特質を再検討する必要がある。

民主主義社会における公共空間の重要性

公共空間は，民主主義社会の中で重要なイデオロギー的地位を占めている。都市公共空間という概念は，少なくともギリシアのアゴラと，それが果たす次のような機能にまでさかのぼることができる。つまり「市民のための場所であり，公共行事や法律上の論議が行われるオープンスペース。…そこは市場でもあり，楽しい押し合いへしあいの場所でもあった。そこでは，市民の身体や言葉・活動，それに生産物などが文字どおり全て見せ合われた。そこでは，審判や判決・契約などが行われた」（Hartley 1992: 29-30）。ポリティクスと商業・演出がアゴラの公共空間の中で並べられ混ぜ合わされた。それは見知らぬ人々が，つまり市民であろうが買い手であろうが売り手であろうが，出会う場所を提供した。そしてアゴラの公共空間は，ほとんど直接的と言える相互交流を促進した。これは上で述べた公共空間の最初の見方である。Young（1990:119）が指摘しているように，そのような「開かれて近づきやすい公共空間や広場」では，「人は人種や社会的な視角・経験・関係などの異なった人々に出会い話を聴くことを期待することができよう」。

Young の定義は，「実際に存在している民主主義」で公共空間が機能してきた方法を経験的に記述したというよりも，むしろ公共空間の規範的理念により近いものを表わしている（Fraser 1990）。この規範的な公共空間の概念は，ハバーマス（Habermas 1989）の非空間的で規範的な公共圏（public sphere）についての議論を反映している。この場合，公共圏は社会と国家の間の関係を媒介する 1 組の制度と活動としてイメージすれば一番よいであろう（Howell 1993 を参照されたい）。この規範的意味での公共圏は，大衆が組織され表現される（もしくは想像される）場所である（Hartley 1992）。ハバーマス（1989）が理論化した公共圏の概念は規範的である。というのは，あらゆる組織方法の社会構成体が，社会の中の権力構造へ通じる道を発見する可能性があるのは，この領域の中であるからである。多くの理論家たち（Fraser 1990; Hartley 1992; Howell 1993）によると，この公共圏の一部として公共空間は，一般大衆のあらゆるメンバーの社会的相互交流と政治活動が生じる物的な場所である。

しかし，古代ギリシャのアゴラ，古代ローマの広場，そして最終的にアメリカの公園や共有地・市場・広場は，決して，単なる自由で直接的な相互交流の場ではなかった。それらの空間は，しばしば排除の場所であった（Fraser 1990; Hartley 1992）。これらの空間で出会った大衆は注意深く選別されており，構造的に均質であった。その大衆は，権力と地位・責任をもつ人々から成り立っていた。こうして，ここに公共空間の二番目の見方の根拠がある。例えば，古代ギリシャの民主主義社会では，市民権は自由で，外国人でない男性に与えられ，奴隷や女性・外国人には与えられない権利だった。後者は，ギリシャの都市の公共空間において，何らの地位も持たなかった。これらの人々は「大衆」には含まれなかった。女性や奴隷・外国人たちはアゴラで働いたかもしれないけれども，これらの人々は公的にはこの公共空間での政治活動から排除されていたのである。

「大衆」はアメリカの歴史において常に包容力をもって定義されてきたわけではない。より多くの，そして様々な人々の集団を大衆の範囲に含むことは，絶えざる社会的闘争を通してはじめて達成されたのである。「大衆」と大衆的民主主義の観念は，私有財産と私的領域の観念と弁証法的に張り合いながら発達した。市民が私有財産と公共空間との間を移動する能力は，合衆国の発展途上の民主主義における公的な相互交流の特質を決定づけた（Fraser 1990; Habermas 1989; Marston 1990）。合衆国のような近代的な資本主義的民主主義において，「私有財産の所有者たちは，自由に互いに集まって，政治的領域の重要な機能的要素を成すような一つの大衆を作り出す」（Marston 1990: 445）。大衆となることは，私有財産の領域へ接近することを暗示している。

もちろん，これらの領域のそれぞれは，とりわけ，ジェンダー，階級，そして人種によって制約されてきた。18 世紀の末までに，

> 公的と私的との間に引かれた線は，本質的に，文明の要請，つまりコスモポリタン的・大衆的行動によって縮図的に示されたものが，自然の要請，即ち家族によって縮図的に示されるものとバランスを保たれた線であった。…人は公的領域で自らを**＜作り上げる＞**とともに，個人的領域において，とりわけ，家族の中での彼の全ての経験において自らの自然を**＜実現した＞**。（Sennet 1992:18-19;強調は原典による）。

私的な領域は家と避難所であり，そこから白人で財産のある男たちが，公共空間の民主主義的な舞台へと思い切って出て行った場所であった [7]。こうして，アメリカ（その他の資本主義）の民主主義社会の公共圏は，私的な（そして通常は財産のある）市民の自発的なコミュニティだと解されている。自然的特質によって（慣習・特権・経済状態によっても），女性や非白人・財産のない人々などは，日常生活において公共圏へ近づくことを拒否された [8]。このように排除に基づいていたので，公共圏は，「非常に問題をはらんだ構成物」（Marston 1990:457）であった。

歴史家の Edmund Morgan（1988:15）にとって，公共性とプライバシーの間の裂け目から生じたこの市民権は，ひとつのフィクションであり，そこでは市民は全面的な公共圏などありえないという「不信を**＜自ら進んで＞**一時停止しようとした」。公共圏の規範的理念は，**＜代表的な＞**大衆が出会うことができるという，つまり皆が「大衆」の中に代表を要請できるという希望を約束する（Hartley 1992）。公共空間と公共圏の現実が示しているのは，Morgan のいう「フィクション」は，代表制度に対する愛想のいい承認にもなっておらず，せいぜい「誰が国家的コミュニティに所属しているのかとか，公的な支配権に対する『国民」の関係などに関するイデオロギー的な構成練習を行う』ことであるということである（Marston 1990:450）。

しかしながら，イデオロギー的な構成物としての「大衆」とか公共空間・公共圏などのような概念は，二重の重要性を帯びている。これらの表現こそは，包摂の概念を意味し，次々に生じる波のような政治活動の結集点となった。時とともに，そういった政治活動は，少なくとも公的には，女性・有色人種・財産のない人々を含む（しかしなお，外国人を除く）ように，「大衆」の定義を広げてきた [9]。逆に，包摂のための闘争を通じて達成された市民権の再定義は，公共圏と公共空間の概念に込められた規範的な理念を強化してきた。公共圏と公共空間は表象のための手段であるというような，包摂と相互交流のレトリックを唱えることによって，排除された集団は，積極的大衆の一部としての彼らの**＜権利＞**を要求することができた。そして「大衆」への包摂を目指し，それぞれ（部分的に）成功した闘争は，他の周辺化され集団に，政治闘争の拠点としてのこの理念の重要性を伝えた。

これらの包摂を目指した闘争において，公共圏と公共空間との区別は，相当な重要性を帯びる。ハバーマスの意味での公共圏は，その中で民主主義が起こる普遍的で抽象的な領域である。いわば，この領域の物質性は，その働きにとってどうでもよい。一方，公共空間は物的なものである。それは，政治的活動がその中で行われたり，そこから出ていく現実的な地点や場所・グランドからなる [10]。この区別は決定的に重要である。というのは，「別の運動が起こって，市民権や民主主義の問題に挑戦していくのは，このような現実的な公共空間を背景にして」いるからである（Howell 1993: 318）。

もし現在の傾向が，公共空間の二番目の見方がより優勢になるにつれて初めの方の見方が次第に浸食されていくことを暗示しているとすれば（Crilley 1993;

Davis 1990; Goss 1992; 1993; Lefebvre , 1991; Sennet 1992; Sorkin 1992），その時には，民衆公園のような公共空間は，Arendt の言葉を使えば「小さな隠れた自由の島」，つまり「フーコーのいう珊瑚礁群島」によって囲まれた反対運動の島となろう（Howell 1993: 313）[11]。これらの隠れた島では空間は，周辺化された人々によって，権利に対する彼らの要求を表明するために占拠される。そしてそれは正しく，民衆公園の活動家たちやホームレスの住民の多くによって主張されたことだった。イースト・ベイ・エクスプレス紙が観察しているように（Kahn 1991c: 11），「結局のところ，彼らが主張したのは，これはやはりテリトリーをめぐる戦いであるということである。それは単に 2 面のバレーボールコートをめぐるものではない。それはこの土地に対して正当な要求を持っている人々の全問題に関わる戦いである」。Michael Delacour は，民衆公園はやはり自由演説のできる場所であると主張したし，ホームレスの活動家である Curtis Bray は，「奴らは人々から権力を奪い取ろうとしている」（New York Times 1991a: 1. 39）と非難した。これらの活動家たちにとって，民衆公園は，現代のアメリカ民主主義社会で一番公民権を剥奪されている人々，つまりホームレスたちに市民権を拡大できる場所であった。民衆公園は，ホームレスの人々も「大衆」の中に入るという正統性を表現する場所を提供したのである。

公共空間における，また「大衆」の一部としてのホームレスの立場

民衆公園はその設立当初からホームレスの避難場所として認識されてきたが，それはバークレー以外の場所では，市当局が街路から不法占拠者やホームレスの人々を積極的に取り除いてきた（時には，使われなくなった市のごみ捨て場に彼らを住み変えさせた）ために他ならない（Dorgan 1985: B12; Harris 1988: B12; Levine 1987: C1; Los Angeles Times 1988: 13; Mitchell 1992a: 165; Stern 1987: D10）。その結果，この公園は，ここへ集まってくるホームレスにとって比較的安全な場所，つまり，ますます敵対的関係になりつつある湾岸地域における数少ない安全な場所の 1 つとなってきた（Los Angeles Times 1990: A1）。湾の辺りでは，ホームレスはシティホールやゴールデンゲートパーク近くのサンフランシスコ国連広場から追い出され，オークランドでは，ぶらぶらすることがたいていの公園において強く思いとどませられた（Los Angeles Times 1989b: 13; 1990: A1; New York Times 1988b: A14）。

視界からホームレスを一掃しようとする願望は一部，私的な個人で構成されている民主主義社会にホームレスが存在しているという大きな矛盾に対応したものである（Deutsche 1992; Mair 1986 ; Marcuse 1988; Ruddick 1990; Smith 1989 を参照されたい）。この矛盾は公共性に反する。つまり，ホームレスはあまりにも目につくのである。ホームレスの人々はほとんど常に公共の場にいるのだが，彼らが大衆の一部としてカウントされることは稀である。ホームレスの人々は二重の拘束に縛られている。彼らにとって，社会的に正当な私的空間など存在せず，彼らは私有財産やプライバシーに支えられている資本主義社会によって公共空間や公共活動への接近を拒否されている。**＜常に＞**人前に存在する人々は，私的活動を公衆の面前で行わざるを得ない。公共空間がこのように不法と思える行動の場と化すとき，公共空間のあるべき姿についての我々の考えは不信に陥る。今や，民主主義社会において公共空間に相応しい活動として想像される「楽しい体の押し合い」や政治的対話のための場所が少なくなり，公園や道路が家の側面を持ち始める。それらは，入浴・睡眠・飲食・恋愛など，プライベートでなされるときは全て社会的に正統な行動であるが，人前で行なわれる時には不法行為とみなされるような行動の場所となる。重要なこととして，近代民主主義における市民権は（少なくともイデオロギー的には）**＜自発的な＞**組織の形成に依拠しており，他方ホームレスの人々は**＜非自発的に＞**公的なものであるので，彼らは，定義上正統な市民ではあり得ないことになる[12]。結果的に，「ホームレスの人々は，権利の自由な行使にとって脅威となる」（Mitchell 1992b :494）。彼らは「正統な」，つまり自発的な大衆の存在を脅かすのである。

こうして，公共の場におけるホームレスの人々の存在は，現代社会のイデオロギー的秩序を堀り崩す。George Will（1987）が，「社会は秩序を必要としており，だから，公共空間の雰囲気の社会化は最小限に留めらるべきだという権利をもっている。ホームレスに

関しては，これは単に美学的な理由からではない。この美学的考察の対象になるものが，単に魅力がないからだけではない。それは，伝染病になるような混乱と腐食の様相を呈している。」[13]と論じたとき，彼は多くの人々に語りかけたのである。だから秩序保持という理由で，ホームレスは「大衆」のほとんどの定義から除かれてきた。その代り彼らは，社会の多くの人々にとって「指標種」のようなものになり，公共空間が不健康と思われることや，都市における公共空間を支配したり私化したり合理化したりする必要性の診断に役立てられた。ニューヨーク市（Smith 1989; 1992a; 1992b），バークレー市（Mitchell 1992a），オハイオ州コロンバス市（Mair 1986）など，いずれの都市であろうと，公共空間におけるホームレスの存在は，一般大衆の心には，不合理で管理されていない社会，その中では適切な公的行動と私的行動との間の区別が不明瞭にされているような社会と映った。こうして，脱工業化都市の「公共の」空間を合理化したいと願っている人々は，正統な公共活動のための余地をつくる目的で，必然的にホームレスを排除，つまり彼らを都市空間の隙間や周辺に追放しようとしてきたのである（Mair 1986;Marcuse 1988;Lefebvre 1991:373 も参照されたい）。

バークレーの民衆公園やニューヨークのトンプソン広場のように，公共空間を封鎖したり，あるいは公園空間に対してより強い社会的管理を加えることによって，公園利用者に対抗するような行為がとられたとき，新聞はこれらの行為を説明して「公園は今のところ麻薬使用者やホームレスの天国になっている」と書いた（Los Angeles Times 1991b: A10 ;Boudreau 1991: A3; Koopman 1991: A13; Los Angeles Times 1991a: A3; 1992: A3; New York Times 1988a: A31 も参照されたい）。そのような記述は効果的に，ホームレスの人々が持っているかも知れない「公共的な」立場を全て無視している。なぜならば，新聞社はホームレスの人々による政治的・社会的・経済的，そして居住的な目的のための公園の利用が，彼らにとって合法的かつ必要な公共空間の使用となるかもしれない可能性を無視しているからである（Mitchell 1992a: 153）。大学当局が「民衆公園のホームレスの居住者は，地域社会の代表者ではない」（Boudreau 1991: A3）と苦情を述べたとき，彼らは本質的にはホームレスと彼らの（多分，必要な）行動の社会的正統性を否定したのである。大学は，公園の利用を変更することによって，不法な活動が思い止まらせられるだろうと望んでいた。すなわち，ホームレスが適切に行動し，公的なものと私的なものとの間の歴史的・規範的・イデオロギー的な境界がよく監視されている限り，ホームレスは住むことができるということである。

現代都市の公共空間

> **＜包摂的な公共空間という概念を提唱する一方で，ホームレスを都市の大衆の一部と見なすことに失敗し，新しい公共空間とホームレスの人々とは両方とも再開発の産物であるという事実を無視し，排除についての問題を提起することを拒絶する＞**。これらの諸行為は，どんなにこれらの場所は「毎日 12 時間もしくはそれ以上の間，大衆に開かれ自由に利用可能である」と宣伝されたとしても，公共の場所の境界を閉じる支配関係を承認する。（Deutsche 1992: 38,強調は原典による）[14]。

> …自由は矛盾を生じさせるが，それはまた，空間的な矛盾でもある。ビジネスは，全体主義的な形態の社会組織，権威主義へ向い，ファシズムとなる傾向をとるのに対して，都市の状態は，暴力にもかかわらず，あるいは暴力によって，少なくとも民主主義の度合いを高める傾向にある（Lefebvre 1991: 319）。

世俗的空間として，近代都市の公共空間は，常にポリティクスと商業との混成物であった（Sennet 1992: 21-22）[15]。理念的には，市場の無秩序は公共空間におけるポリティクスの無秩序と対応して，相互交流的で民主的な大衆を作り出す。しかしながら，20 世紀には，市場はますますポリティクスから切り離されてきた。初期アメリカの民主的イデオロギーを導いた公共空間についてのかつての包摂的な概念と，「部分的かもしれないが」公的な権利を女性や有色人種・無産者に拡大するような動きは，それらに対抗する社会的・政治的・経済的な傾向，つまり，優勢な社会的・経済的利害関係者に脅威を与えるような，民主的な社会的権力のいかなる行使に対しても多くの人々を反発させるような傾向によって危険にさらされてきた（Fraser 1990; Harvey 1992）。

これらの傾向は，公共空間の圧縮を招来させてきた。相互交流的・対話的なポリティクスは，都市の中の集

合場所から着実に禁止されてきた。企業や政府の計画家たちは，相互交流よりもむしろ安全，つまり（多分，不和を生じさせるであろう）ポリティクスよりもむしろ娯楽をという要望に基づいた環境を創り出してきた（Crilley 1993; Garreau 1991; Goss 1992; 1993; Sorkin 1992）。そういう計画の所産の 1 つは，Sennett（1992）が「死せる公共空間」と呼んだもの，つまり，非常に多くの近代的オフィスビルを囲んだ無味乾燥な広場の増大であった。2 つ目の結果は，消費をけしかける祭りの空間，つまりダウンタウンの再開発地区，モール，催し物広場などの開発である。見かけは異なっているけれども，「死」と「祭り」の両方の空間は，大衆の行動に対して秩序と監視・管理が必要だという認識を前提としている。Goss（1993:29-30）が我々に思い出させたように，我々はしばしば，市場と政治的な機能を分離している点で彼らと共謀している。彼は，現代のショッピングモールのような見せかけの公共空間を取り上げている。

> 我々の中の何人かは…，〔モール内の〕カメラの列と安全警備員のパトロールによる監視を常に思い起させられて，いらいらさせられている。だが，そのデザインの対象にされている我々の方は，公共都市空間の特権を相対的に慈悲的な当局に委ねたいと思っている。なぜなら，我々の要望は，経験の代理品としての郷愁，存在に代る不在，本物に代る再現を快く受け入れたいということだからである。

Goss（1993:28）は，このような市場への郷愁的な願望を「アゴラ愛」と呼んでいるが，それは「生産者と消費者の間の直接的な関係」に対する切なる思いである（Hartley 1992 を参照されたい）。

しかしながら，そのような郷愁が「無垢」ということは稀である（Lowenthal 1985 を参照されたい）。むしろ，それは商業とポリティクスの場としてのアゴラの理想とは全く異なる非常に凝った，企業化された市場のイメージである（Hartley 1992）。これらの空間では，快適さや安全，利益という名のもとに，政治活動は売るためにデザインされ高度に商品化された演出によって置き換えられる（Boyer 1992; Crawford 1992; Garreau 1991: 48-52）。モールや企業広場のような疑似公共空間の計画家たちは，管理された多様性が，管理されていない社会的相違性よりも有益であることに気づいた（Crawford 1992; Goss 1993; Kowinski 1985; A.Wilson 1992; Zukin 1991）。その結果，新しい諸集団が社会的権利への一層の接近を要求している時でさえ，「大衆」の均質化がそれと歩調を合わせて続いている。

この均質化は典型的には，空間と場所の「ディズニー化」によって進められ，すべての相互交流が入念に計画されるような景観が形成されている（Sorkin 1992; A.Wilson 1992; Zukin 1991）。このように，市場とデザインの考慮が，現代世界における都市の空間的形態の決定に関与した人々の間の，特有で即妙の相互交流に取って代わる（Crilley 1993: 137; Zukin 1991）。デザインされた人工的な多様性は，売れる風景を形成する。それは，交換価値を傷つける恐れのある場所をつくりだす，管理されていない社会的相互交流とは対照的なものである。空間の「ディズニー化」とは，結果的には，人々を直接的な社会的相互交流の可能性からますます大きく引き離すこと，また空間の生産と使用に対して強力な経済的・社会的行為者たちによる管理がますます強まることを意味する。

空間的な相互交流に対して制限と管理を課すことは，今世紀を通じて都市と企業の計画家たちの主要な目的の 1 つであった（Davis 1990; Harvey 1989; Lefebvre 1991）。社会的**＜相違＞**の拡張を通して生み出された領域的分化は，規制された**＜多様性＞**の祝福にますます取って代わられてきた[16]。ショッピングセンターや「巨大構造物」，企業広場，そして（ますます頻繁に）公園に表現されるようになってきた多様性は，入念に構成されている（Boyer 1992）。さらに，計画と販売の論理が大衆の集会場所における全てのマナーへと拡張されて，社会的諸集団を，それらの政治的闘争という指令方針よりむしろ慰安と規律という指令方針によって分類し分割する「社会的実践の空間」が生み出された（Lefebvre 1991: 375）。しかし,ルフェーヴル（1991: 375）が指摘しているように，これは偶然ではない。彼の主張によれば，都市と企業の計画家たちの戦術は，（指導権を行使するというものではなくて）「さまざまな社会階層と階級を分類し，利用できる領域全体に配分して，それらを引き離された状態に保ち，全ての接触（これらはサイン（またはイメージ）の接触に置き代えられているが）を禁じることである」。

イメージとサイン，あるいは表現へのこのような依

存は，当然の結果として，そういうものとしては存在できない「大衆」が，我々の頭で描かれている民主主義像の中にいつまでも存在**＜させられる＞**，という認識を生じさせる。すなわち，「大衆は全体としては全く会えない…」けれども「大衆はメディアの中では実物大の大きさで，今もなお見出すことができるのである」（Hartley 1992:1）。ここから，「現代のポリティクスは言葉の二つの意味で**＜表象的＞**である。すなわち，市民は選ばれた少数者によって代表され，ポリティクスはコミュニケーションのさまざまな媒体を通して大衆へ表象される。表象的な政治的空間は文字どおりイメージ像によって作られていて，それらが公共領域を**＜構成する＞**」（Hartley 1992: 35; 強調は原文中のもの）。後の方で私はこの象徴的なポリティクスと都市の物質的な空間におけるそれへの抵抗というテーマへ立ち返るだろうが，今のところは，象徴作用やイメージ・表象などをめぐるポリティクスがますます，公共空間における直接的で媒介なしの社会的相互交流という民主的な**＜理念＞**に取って代わっている，と記しておけば十分である。言い換えれば，現代の「公共」空間のデザイナーたちは，ますます，接触のサインとイメージを接触それ自体よりも，より自然で望ましいものとして容認しているのである。

公共空間と疑似公共空間は，管理された表象が自然であり望ましいと見なされる政治的・社会的システムの中で新しい機能を帯びる。公共空間の最も重要な目的は，「劇場のように入念に形どられた公共の範疇」を作り出すこととなった（Crilley 1993:153; Glazer 1992 も参照）。「意義深いことに，それはなだめすかされた大衆が，企業によって注意深く組み合わされたスペクタクルの壮大さに浸る劇場である」（Crilley 1993: 147）[17]。それは Davis（1990: 223-263）によって批判された，企業のプラザ，図書館の広場，郊外道路，また Sorkin（1992）が編集した本への寄稿者たちによって分析された，お祭り広場，地下歩行者区域，そしてテーマパークのような，入念に管理された「公共」空間の狙いである。それは明らかにモール建設者の目標である（Garreau 1991; Goss 1993; Kowinski 1985; A.Wilson 1992）。

これらの管理されたスペクタクルの空間は，「大衆」に値するリストをせばめる。スペクタクル，劇場，そして消費の公共空間は，大衆を規定するイメージを作りだし，これらのイメージはホームレスと政治活動家を「望ましくない」として排除する。こうして，これらの公共空間と疑似公共空間から締め出されたので，大衆の一員としての彼らの正統性は疑問視される。そしてこのように「大衆」についての我々のイメージに**＜表象されない＞**ので，彼らはポリティクスの外側の領域に追放される。なぜなら彼らは都市の集会場所から追放されるからである。

どのように「大衆」が（空間として，社会的存在として，そして 1 つの理念として）定義されイメージ化されるかは，ある程度重要な問題である。Crilley（1993: 153）が示しているように，空間の企業的生産者たちは，大衆とは受動的かつ受容的で，「上品」なものだと定義する傾向がある。彼らは，「都市の群衆の持つ社会的異質性」を濾過し，「［そして］その場所に，街路の環境を特徴づけるようなぞっとするほどのレベルに達したホームレスの人々や人種化された貧困になるべくさらさずに，白人中産階級の仕事・遊びそして消費…の完全な構成物を置き換えることによって，同質化された大衆という幻想」を助長する（Crilley 1993: 154）。そして，私有財産と公共空間との間の区別を曖昧にさせることによって，彼らは狭く定義された大衆を作りだす。（ディズニーランド，ボストンのファニュエイル・ホール，あるいはニューヨークの世界金融センターのような）注意深く管理された空間の幻想は，公共空間の概念と「共謀して，公共圏を広範に私化し，それを商品の地位にまでおとしめているという事実を我々から隠す」（Crilley 1993: 153）。この皮肉はもちろん，ホームレスの人々による公共空間の私化（我々が私的と考える活動のために公共空間を彼らが使用すること）が，都市計画家・政治家そして同様に社会評論家にも激しく非難されている同じ時に，公共空間の私化が全ての政府のレベルで賞賛されているということである。

公共空間は終焉したのだろうか？

それなら我々は，「公共空間の終焉」（Sorkin 1992）に至ったのだろうか。資本とホームレスの人々による公共空間の（非常に異なってはいるが）二重の私化によって，工作された多様性が見知らぬ者同志の自由な

相互交流に完全に置き換わって，直接的な**＜政治的＞**公共空間という理念が全く非現実的になるような世界が作り上げられたのだろうか。我々は個人的な相互交流，個人的なコミュニケーション，また個人的なポリティクスだけを期待し切望する社会や，商品化された娯楽や見せ物のためだけに公共空間を残す社会を作り上げてきたのだろうか。Garreau（1991）のような主流をなす批評家や，Glazer（1992）のような保守派が信じているのと同じように，多くの左翼の文化批評家たちもそう信じる。これらの著者たちにとって，公共空間とは，公的秩序や公共安全について異なった感覚と意見をもっていた時代，公共空間が安定しており皆が近づきやすかった過去の時代の人工物なのである。しかし，これらの，過去の公共空間と過去の公共圏に関するイメージは高く理想化されている。即ち，我々が見てきたように，過去のアメリカにおける公共圏はかなり包括的なものであり，公共空間は常に紛争の場であり，紛争の原因であった。公共空間と「大衆」の定義は普遍的なものでも恒久的なものでもない。それらはむしろ，過去においても現在においても，絶え間ない闘争を通して作り出される。そしてまた，民衆公園でも，他の多くの場所と同様に，そのような闘争は続いている。

しかし，このような類の空間は次第に減少している。多くの都市が，公共の名の下に所有され管理される公園，自転車に乗ったりハイキングしたりする道路，自然領域，その他同様の場所のストックを増やしているという事実があるにも関わらずである。それは都市化された地域の中や周辺におけるオープンスペースの保存が最も強く市と郡の指導者たちに支持されているコロラド州ボルダーにおいて確かにあてはまる政策である（Cornett 1993: A9）。山岳公園，プレーリーランド，小さな都市ブロック，農園，そして湿地帯はすべて残されてきた。しかし，これらの公共空間は政治的な意味をもっているのだろうか。

第二次世界大戦後の数十年間に生じた急速な郊外化と都市再開発の間に，北アメリカの諸都市は「オープンスペースを随分と増加させたが，その一番の目的は［市民的機能をもった公共空間を作るのとは］違っていて，例えばビルの間の距離を空けることや，日の通りを良くしたり緑樹を植えたりすることであって，より深い社会的交流のための場を提供することではなかった」（Greenberg 1990; 324）。オープンスペースの増大には多くの動機がある。すなわち生態学的に敏感な地区を保存したり，開発不許可の緑地帯を確保して財産価値を維持したり，レクリエーションのための場所を供給したり，河川敷を開発から除外するなどである。しかし，どの場合にも，オープンスペースは政治的な公共空間とは異なる機能的・イデオロギー的役割を果たした。これらのようなオープンスペースが，都市の公共空間を特徴づける市場の機能や市民的な機能のために計画されたり占有されたりといったことはめったにない。より典型的には，これらのオープンスペースは，疑似公共空間とある特徴を共有している。行動や活動に対する制限は当然のこととされている。目立った掲示板が，適切な使用目的を指示したり，歩いたり，乗り入れたり，集会をするといった，場所利用に関する規則の大枠を与えている。これらは著しく統制された空間である。

バークレーにおいて UC の役員はオープンスペースと公共空間の間のこの区別を認識していた。民衆公園をめぐる種々の討論の間に，大学に味方する発言者たちは決して公共空間としての公園について言及しなかった。もちろん，彼らはしばしばその公園をオープンスペースとして維持することに関わっていると繰り返したのだが（Boudreau 1991; A3）。バークレー市議会のメンバーの Alan Goldfarb は，時々大学計画を非難したのだが，彼もまた公共空間とオープンスペースの違いをうまく利用した。民衆公園のことを言うとき，彼は公共空間の価値を誉めたたえ，そして密かに傷つけた。

> それは警察とホームレスや，何も持っていないものと持っているもの，進歩と騒動，開発と非開発などの対立は，都市の底流にあるトラブル全ての象徴である。あなたは乞食に出会ってきただろうし，近くのビジネス社会に接し，市民と大学関係者の緊張を見てきた。あなたは無政府主義者と伝統主義者に出会う。民衆公園は全てのこれらの活動家たちにとって生活舞台である。世界の多くの人々にとって，バークレーは民衆公園**＜なのだ＞**（Kahn 1991 a: 28; 強調は原文中のもの）。

しかし，もし［これらのことが事実かつ重要である］のならと，彼は続けた。民衆公園を，非常に都市化された近隣地区に少しの緑を供給する「生き生きとした

オープンスペース」にすることがより重要であると（同上書）。

新たな公共空間だろうか？

オープンスペースの増加に重きを置いた議論よりも，公共空間の終焉を主張する議論の方が一層説得力がありさえする。多くの分析者たちは，空間の特質そのものが通信技術の発達によって変化させられてきていると指摘している。彼らはメディアとコンピュータ・ネットワークからなる電子的空間が公共空間の新しいフロンティアを開き，そこでは都市の物的公共空間がテレビの討論会やラジオトークショー，コンピュータの伝言ボードなどに取って代られると考えている。多くの学者たちにとって（企業家はいうまでもなく），いまや近年の通信技術は，一般には対話的な公共活動のための，特殊にはポリティクスのための主要な場所を提供している。電子的な伝言ボードやネットワーク，ファックス機器，トークラジオ，テレビなどを公共空間として定義することは，空間の物質性についての我々の伝統的想定を拡張させ，地球村としてのテレビを称賛し，「最初の電脳国家の形成」（Roberts 1994:C1）に関する考察作業を開始させる。これらの技術では，市民権はもはや公的ジオグラフィと私的ジオグラフィという二分法を必要としていない。モデムを使ってテレビやラジオ，あるいはコンピュータにアクセスすることで十分なのだから。

多分，公共空間としての電子的空間に対して最も楽観的な見方をしているのは，CUNY 大学院の文化研究委員会のマスメディアグループ（以下, MMG）である。彼らは「今日のメディアは公共圏**＜に他ならず＞**，これが公共生活の消滅とまではいかないまでも，その衰退の理由である（Carpignano et al. 1990: 33 原文中の強調）」という「疑い得ない公理」の後半部分に異を唱えている。その代わりに，MMG はテレビトークショーの発達が，「大衆」を一般大衆的なポリティクスや娯楽の聴衆から，対話的で相互行為的な実体に変えたと論じている。TV のトークショーは，その中で「新たな対話的な実践が，伝統的様式の政治的・イデオロギー的表象と対照的に生み出されている『競われた空間』を構成している」（Carpignano et al.1990: 35）。

MMG にとって，トークショーは現在，過去の時代の理想化された町の集会に類似した方法で「常識」を生みだす「共通の場所」である。「常識は，［これらのショーでは］電子的に再生産されるために公共空間とみなされうるような，電子的に規定された共通の場所の所産と定義される。その最も基本的な形として，今日，公の場に出るということは，放送に出ることを意味する」（Carpignano et al.1990: 50）。MTV は，1992 年の大統領選挙のキャンペーン以降，公共の場に出ることをさらに無効にした。1992 年 11 月 9 日，このネットワークは国中の新聞に，「立ち上がって，参加し，投票した 1700 万人の 18〜29 歳の人々に敬意を表する」全面広告を出した。その広告は，「MTV は，未来のコミュニティである。」というロゴを掲載した。MTV の投票促進キャンペーンと同様に，この広告は，「AT&T，フォード自動車会社，そしてあなたのローカルケーブル会社によって提供」された。MTV のキャンペーンは，「よくしゃべる時代の」電子メディアの権力についての MMG の楽観的評価を弱める。企業の後援が公共空間を可能にさせたのである。

トークショーの「治療上の」対話的実践（Carpignano et al. 1990:51;また，Sannett 1992: 12, 269-293 も参照されたい。）と，公共空間の私化・管理化との間の類似性は，一目瞭然である。両方のケースにおいて，この媒体の物質的構造は政治的な可能性と機会を閉めだす。（直接的であるという MMG の主張に反して）午後のトークショーという公共空間に集った「大衆」は，**＜あらかじめ＞**脚本化され選択された聴衆である。その聴衆のメンバーは，はっきりものを述べること，論争の立場を明確にすること，そしてスポンサーあるいは視聴者を完全に遠ざけることなしにこの演出に参加することを期待される。現代の公共空間に対する MMG の評価とともに, MTV による未来のコミュニティの構築は，このようにより伝統的な公共空間の商品化と廃除を明言する学問的な結論にぴったりと合う（Crilley 1993; Davis 1990; Sorkin 1992; Zukin 1991）。

こうして，公共圏の電子的メディアへの移行は，民主的なポリティクスのための物的空間の利用を一層締め出す。もし，MMG が正しいのならば，ポリティクスは今後，メディアを通じて**＜のみ＞**，高度に組織化され支配された「空間」を通してのみ，「放送されるこ

と」によってのみ，可能であろう。MMG は，トークショーの構成の特質，つまり，対立とショックとの間の妥協が，「ある別の対話的実践の強化の幕開けになる」（Carpignano et al.1990: 52）と指摘することによって，この状況をもっとも鮮明に浮き彫りにしている。しかし，この強化は，ほとんど専ら個人的独我的な治癒力の強化であり，別の政治的プロジェクトに関しては何も役立たない[18]。「ディズニー化された」都市空間のように，これらのショーは，ある種の「大衆」を創り出す。それは，個々人が節度を守り高度にコントロールされた方法でとはいえ，腹を立てることを許されるが，確立された秩序構造を究極的には全く脅かさないような大衆である。「大衆」の演技は，公の演技へと解体していく。

別の前面においては，コンピュータの「スーパーハイウェイ」や公共の「電脳国家」の見通しが混ぜ合わされる。インターネットの大部分を独占したいという合衆国政府の願望は，電子的ネットワークは**＜公的＞**・政治的空間だとばかり見ることはできないことを示唆しているように思われる。実際には，正反対のことが起こっているように思われる。心配症の遠距離通信会社が一斉に，現代の公共のネットワークの様々な部分の知的所有権を獲得しようとしているからである[19]。重要なこととして，電子的コミュニケーションは，アゴラにおいて具体化されたものとは違った理念を実現しており，社会内部のいろいろ異なった組み合わせの願望に答えている。「社会が期待することと［自動空間］が具体的に示すことは，伝達コミュニケーションの私的な倫理によって自らを管理することであり」（Hillis 1994: 191），電子的ネットワークは，この願望に対して完全な技術となりつつある。これは，公共空間における表現の問題を再び提起する。完全な電子的公共空間は，ホームレスのように，社会から疎外された集団のポリティクス活動を見えないようにさえしてしまう（Hillis 1994）。Prodigy とか Compuserve といった民間のネットワークの経営者たちによって起こされた，やっかいな初期の改善問題は別として（Naughton 1992; Schlachter 1993），インターネットの公共圏にはホームレスの人々が住むための場所は文字どおり用意されていない。彼らのニーズや願望・政治的表現は，都市空間において見られるようには，もはや見られることはできないのである。

物的公共空間の必要性

> 都市の安全を確保しようとする聖戦は，真に民主的な空間を全て破壊するという普遍的な結果をもたらす（Davis 1992: 155）。

このような，電子的世界の未来像や公共空間にとってのその意味の解釈は，挑戦されてこなかったわけではなかった。反対者たちは，社会運動が都市の物的公共空間を占拠し再構成しなければならないし，また実際そうするという考え方を今でも持っている。事実，これらの運動は，民主的（そして真に革命的）なポリティクスは同時に物的空間を創造し統制しなければ不可能であるという考え方に基づいている。1989 年 5 月の天安門広場の集団抗議はその好例を提供している。天安門は革命運動にとってテレビその他の電子的メディアがいかに重要かを明らかにしたけれども，とりわけ重要なのは物的公共空間の占拠であった。電子的コミュニケーションが，この抗議を組織するのに重要な役割を果たしたけれども，この蜂起はこの広場自体が記念的かつ公式的な空間から「正真正銘の政治的対話の場所」へと変わることで本格的に始まったのである（Calhoun 1989: 57）。学生と他の運動家たちは「議論しようと友達の小集団として集い，演説を聞く大聴衆となり，彼らの集団的戦略と自治の実行方法を議論するための代表者会議に近いものになった」（同上書）。大衆による天安門広場の占拠は，「明らかに『場所のない』運動が，新しい真に革命的な方法で空間を創造し変化させる異常な力をもつに至った」明白な「証拠」である（Hershkovitz 1993: 417）[20]。このような場所に依拠した闘争は，だからメディアによって報道された。この広場は表象のための場所となったのである。この場合，政府に対抗する強力な大衆運動の表象であった。天安門広場や民衆公園のような空間は，反対運動が一層広い規模に広げられることを可能にする。空間が獲得されたあと，対抗的表象は地域闘争の境界を越えて拡大する。しかしながら，もし物的空間の占拠がなければ，天安門や民衆公園で極点に達したような種類の抗議は日の目をみないままであったであろう。

だから，公共圏へ入る手段としてメディアへ依存することは危険である（Fraser 1990）。「ブルジョアの公共圏」（すなわち，ハバーマスによって記述され，また

18・19 世紀のブルジョア興隆期を通して発達した公共圏）におけるメディアは，「民間資本によって所有され利益のために運営されている。その結果，従属的な社会集団には平等な参加を保証する物質的手段への等しいアクセスがない」（Fraser 1990: 64-65）。このようなアクセスの問題を克服するために「従属的な抗議大衆」は，「従属的な集団のメンバーたちが対抗的な対話を創り出し広めるような対話の場を並行して創り出したが，それが今度は彼らが自分たちのアイデンティティや利益・ニーズについて対抗的な解釈を考え出すことを可能にさせる」（Fraser 1990: 67）。対抗する大衆は，これらの舞台や空間において，大衆の他の党派によって見られることができる。これらの空間がなければ「大衆」はバラバラにされる。したがって，公共空間の占拠は，「**＜公共主義的（publicist）＞**という方向性をおびているので，長期にわたって分離主義に対抗する。これらの舞台が**＜公共主義的＞**である限り，それらは定義上は包領ではないが，そうはいっても，それらがしばしば不本意ながら包領化されないと言うのではない」（同上書；強調は原典による）[21]。

テレビは政治的な運動や革命を左右する重要な役割を持っているけれども，専ら電子的空間で行われる革命はあり得ない。革命には街路への進出と公共空間の獲得が伴なう。それらは以前は秩序によって特徴づけられていた場所での無秩序の創造を必要とする（なぜなら，革命は絵画的な事件でもあり，表象されなければならないからである）。政治的運動はそれらが表象され**＜得る＞**ような空間をつくり出さねばならない。ルフェーヴル（1991）は空間の表象と表象の空間の継続的な形成を理論づけたかもしれないが，大衆的社会運動家たちは，表象**＜のための＞**空間をつくり出さねばならないことを理解している。南アメリカの南部トウモロコシ国家での「母親たちの運動」を考えてみよう（Scarpaci and Frazier 1993）。「消された人たち」の母親たちは，公共広場やモニュメントを占有することによって，彼女たちの「大義」を公然と表明した。彼女たちの公共空間の占拠は，彼女たちの大義を「報道」させることになった。これらの空間がなかったら，母親たちの大義は都市・地域・国家のすみずみへ，またテレビの目を通じて世界へ伝えられなかっただろう。

このパターンは，ほかの場所でも繰り返された。東ヨーロッパと中国では 1989 年に，ソ連でもその後まもなく繰り返された。同じような戦略による公共空間の占拠は，1910 年ごろの世界中の工業工場労働者による言論の自由を求める闘争（Foner 1965; Dubofsky 1988）や，1960 年代の市民権運動，農業労働者運動，反戦運動などによっても行われた。このパターンはまた，1930 年代のイタリアとドイツにおけるファシスト運動にも当てはまる。それは，社会運動が空間を解放したとき，結果は必ずしも「革新的」ではないということを思い起こさせるものであった。公共空間の創造と維持は，このように民主主義自体への危険を伴い，それは公共空間を本質的に危険なものにする。

公共的で直接の，そして完全に政治化された空間に対する反対者は，公共空間の「囲い込み」によってこの危険に対抗した。公共空間における混乱と暴力を恐れて，開発者，都市計画家，市の役人のなかには，公共空間内での活動を制限することによって空間を管理することを唱える者もいた。こうして，強力な排除の過程は，公共空間内にあって，それに必然的に付随した，しつこくてコントロールされていない差異の働きに対抗して進んだ。ルフェーヴル（1991: 373）が論じているように，差異は社会秩序を脅かし，それゆえに支配権力によって吸収されなければならない。

> 抵抗の形であろうと，また分離の形であろうと，均質化された領域の周辺において差異は起こる…。まず第一に，違っているものは**＜排除される＞**ものである。つまり，都市の縁辺とか，掘立て小屋集落，禁じられたゲームの空間，ゲリラ戦争の空間，戦争の空間などである。しかしながら，遅かれ早かれ，既存の中心とその均質化の力は，そのような全ての差異を吸収しようとするに違いない。そしてそれらは，もし，それらが防御的な姿勢を保ち，それらの側から反撃しようとしなければ成功するであろう。後者の場合においては，中心性，正常性は，逸脱するものすべてを統合し，回復し，あるいは破壊する力の限界を試されるであろう。（強調は原典による）

左派から挑戦されようと，右派からであろうと，政府や資本の確立された権力は，公共空間内での公的権利の行使によって脅かされる。

このような，一方では秩序を，他方では権利および表象をそれぞれ求める矛盾した願いが，1991 年の民衆公園暴動を構造づけた。バークレーの活動家たちは，拡大と反対のために闘った。つまり，彼らが感じていたのは，政府と企業資本主義の権力は，空間の（再）

獲得によって対抗されなければならないということだった。民衆公園を獲得し維持することによって**＜のみ＞**，対抗的な政治活動は表象され，進展させられうるだろう。David Nadle のような活動家にとって，その先例は明らかである。民衆公園の闘争は，もう 1 つの「天安門広場」であった。そこでは公園活動家とホームレスの人々が一緒になって巨大な非人間的企業型国家の拡大を阻止しようとしていたのである（Kahn 1991b: 30）。

結論：公共空間としての民衆公園は終焉しただろうか？

大学当局は，明らかに先例に依っていたように思われる。大学の無名の被雇用者によれば，バークレー校の学長，Cheng-Lin Tien は，「理事たちに自分はタフであると見せるために暴力や対決を望んでいたので」，この暴動の間，活動家たちとのさらに進んだ話し合いの可能性を「個人的に拒絶した。彼は，ペルシア湾でのブッシュの行動のことを暗に指した。つまり，話し合いができないのなら，ただ攻撃するのみである」（Kahn 1991c: 13）。攻撃は必要である。なぜなら，ホームレスの人々や活動家たちによる民衆公園の占拠は，不法で非正統的であったからであり，また，その占拠は大多数の人々を公園から締め出しているからである。バークレー市のマネージャー，Michael Brown は，市は公共空間のより規律正しいビジョンの実行を保証するために必要なことを全て行うと約束した。ホームレスの居住者や活動家たちに言及して，Brown はニューヨークタイムス紙に次のように語った（1991c: A8）。「もし，彼らが民主主義社会における大多数の意見をふさいでしまったら，市，大学当局，郡，そして政府は，法律を遂行するために必要などんな力もすべて適用してくるだろう」。Brown はこの約束を守ったのである。抗議する人と警察との闘争の真っ只中，Brown は次のように語った。「我々はそこで，重要な事態に直面している。人々は，これは公園のバレーボールのことについてだと思っているが，そうではない。それは，自分たちの意思を地域社会に力ずくで反映させるために暴動を使うことができると思っている人々の集団についてである。そして我々は，それを受け入れる気はない」（Lynch 1991a: A21）。「我々は，ほとんど市の自治機能を失っている」と，彼は後に付け加えた（Kahn 1991c:13）。Brown によると，警察や市の行政機関には，街路での混乱したポリティクスを静めることは，ほとんど不可能に近かったのである（同上書）。

バークレーの民衆公園をめぐって交わされた，長期間ぐつぐつ煮え立った，時には白熱した論争は，「大衆」と公共空間の本質を定義する闘争の典型である。活動家たちは，この公園のような場所を，表象**＜のための＞**空間とみなしている。公共空間を**＜獲得すること＞**によって，社会運動はより大きな聴衆の前に自らを表象する。反対に，主流をなす公共機関の代表者たちは，公共空間は，正しく機能を果たすためには，秩序が整っていて，安全なところでなければならないと主張している。これら根本的に対立した公共空間の見方は，1991 年８月に起こった民衆公園をめぐる暴動で衝突した。民衆公園の「公的」地位は依然として曖昧であるが（その土地に UC の法律上の肩書は与えられているが），公共空間としての公園の政治上の重要性は，**＜獲得された＞**空間としてのその地位に依存している。政府から民衆公園の管理を奪うことによって，公園の活動家たちは，管理と秩序，そして政府権力といった問題を追求した。しかし多くの他の人々にとって，ホームレスの人々の避難所としてのこの公園のもう 1 つの歴史は，次のようなことを暗に示していた。民衆公園は管理できない場所になってきたこと，一般市民の大部分が，公園のかなり大きな居住人口によって脅かされていると感じていたこと，そして市と大学が，公園に対してより一層強い管理を行う必要があったことなどである。20 年以上もの間，UC が公園を再利用しようとし，公園にふさわしい市民とそこでふさわしい行動とみなされるものを限定しようと努力している時，これらの公共空間としての公園の見方は衝突したのである。

民衆公園の歴史が展開するにしたがって，ホームレスの人々はかなり図像的になってきた。民衆公園をめぐる闘争によって引き起こされた問題の 1 つは（そして私が完全な答えをもたない問題の 1 つでもあるのだが），民衆公園のような「安全な天国」が，ホームレスの人々自身のニーズにどの程度まで対応することができるかという問題である[22]。確かに都市におけるホームレスの人々のために「自由な空間」を提供することは，資本主義社会におけるホームレスという構造的所

産と取り組むのに何の役にもたっていない。これらの「天国」は，ホームレスの人々に対して必ずしも安全を提供しているわけではない（Vaness 1993 参照）。しかし，私が主張してきたように，民衆公園のような空間は，政治的な空間でもある。ホームレスの人々にとって，これらの空間はまさに「家」以上のものである。これらの空間はホームレスの人々が見られたり表象されたりできる場所として，またホームレスという特質に対する活動が生じ，外へと拡張することができる場所として貢献している。これらの空間を舞台にして，ホームレスの人々とその他の人々は，電子工学最前線の何もない空間や，モールや祝祭市場といった高度に管理された疑似公共空間では不可能なやり方で，公的な表象や承認を強く要求することができるかもしれない。

それゆえ民衆公園は，アメリカ（やその他の場所）で今なお続いている公共空間の本質をめぐる闘争の中の重要な実例である。そこで起こった暴動は，公共空間の適切な利用法，正統な大衆の定義，そして民主主義的対話と政治的活動の本質へ我々の注意を集めさせた。さまざまな行動者が彼らの民衆公園での自らの動機を評価するのを聞くことによって，我々は，公共空間をめぐる闘争は対立するイデオロギーをめぐる闘争であり，社会のメンバーが公共空間を概念化する仕方をめぐる闘争であることを知った。これらの公的な発言は，相互に対立するイデオロギー的立場を反映し，公共空間についての対話の中の 2 つの極の 1 つに，多かれ少なかれ固執する。2 つの極とは，直接の政治的相互交流の場としての公共空間と，秩序のある管理されたリクリエーションと娯楽の場としての公共空間である。「公共空間の終焉」という理論を主張する者は，都市における秩序正しく管理された公共空間という見方は，公共空間の別のイメージ方法を圧殺していると指摘している。民衆公園の最近の歴史は，これらの主張は大いに重要ではあるが余りに単純であるということを示している。対抗運動は常に，公共空間のより広い見方の普及を確実なものにさせようと努めている。公共空間の「ディズニー化」が進み，政治運動が公共空間から閉め出される分，対抗的運動は，それらが「大衆」の正統な部分として表象されるかもしれない（あるいはそれ自身を表象するかもしれない）空間を失う。バークレーの闘争家たちの言動が示しているように，その利害関係は強く，それらをめぐる闘争は血をみることも十分ありうる。しかし，それこそが公共空間の頼もしさであり，また危険性でもある。

終結部分

今はどうかといえば，民衆公園をめぐって不安定な休戦状態にある。1993 年 1 月の日は射しているが寒い日曜の朝，約 30 人から 40 人のホームレスの人々が眠ったり，ベンチに座ったり，三々五々くつろいで話合っていた。ネットの取れたバレーボールコートは空いていた。バスケットボールコートにも人気はなかった。新しい建物は既に落書きに覆われ，便所の小室のドアはなくなっていた。学期中，学生たちが，この公園の広い草蒸した中央部分を見渡すことのできるこの建物の一室からバレーボールとバスケットボールを借りる場合もあった。何人かの公園の住民によれば，この部屋は警察の派出所も兼ねていた。この特別な朝，シャッターは下ろされていた（第 7 図）。落書きのいくつかはギャングや個人の「決り文句」であるように見えるが，そのほとんどは 1969 年と 1991 年の暴動事件を描写している（第 8 図）。また，Rosebug DeNovo に関連するものも書かれていたが，彼女は公園の常連で，肉切り包丁を振り回して UC の学長宅に侵入した後，警官に殺された女性である（Fimrite and Wilson 1992: A1; Snider 1992: A1）。警官は公園を巡回しているが，今朝，彼らはホームレスの人々からほとんど注意を引かない。

この朝の 9 時までに，少数の女性たちがこの日の抗議のために到着したが，それは公園の活動家たちが今も活動舞台としてこの公園を使用し続けていることを思い出させるのに役立つ（第 9 図）。しかし，政治活動についての彼らの記述には，現在，警官の虐待の物語と警官によってレイプされた女性たちの噂が各所に散見される。私にはこれらの説明の真偽の程を確認できないが，これらは一言一句，この空間を今も支配し続けている敵意と不安を生き生きと物語っている。確かなことは，UC が 1991 年の暴動の間の被害を言い立てて，公園の防御者と活動家たちに対して一連の裁判を起こしたことである。1993 年の初頭に，UC はある交換条件でこの被告人たちと和解することを提案したが，

その条件とは 10,000 ドルを支払うことと，彼らに大学に対して乱暴と暴力を働くことや「この公園の建設に干渉すること」を禁止する恒久的な命令を承諾することであった。被告人たちは，UC は批判を封じ込めようと狙っていると断言して，この和解を蹴り，自分たちは公的参加に対する戦術的控訴（Strategic Lawsuit Against Public Participation）の犠牲者であると主張して逆提訴を行った（Stallone 1993: 9）[23]。

今日のような美しい日曜日の朝，そのような問題は私には縁遠いように思われるが，私が話している女性たちにとっては，そうではない。 彼女たちは大学の訴訟の被告人である。警察は我々の活動を監視するのにますます多くの時間を費やしている，という。自由演説台とフリーボックスは今も立っている。しかし，夜通うし輝く防犯灯も同様に立っていて，公園の大部分を照し出している。これが公園活動家たちが心に描いた公共空間だろうか。それは大学が望むオープンスペースだろうか。私にはよく分からない。私が知っているのは，これらの問題は解決にはほど遠く，我々がこれほど大量のホームレスの人々を生み出している社会に生きるかぎり，これらのような空間は，常に社会闘争の的になるだろうし，実際にそうなるに違いないということである。というのは，「大衆」と民主主義の本質が定義されるのは，空間をめぐる，そして空間の中での闘争によってであるからである。

謝辞（省略）

注

1. この暴動の一番よいレポートは，週刊イースト・ベイ・エクスプレスであり（Auchard 1991: 1ff; Kahn 1991c; Rivlin 1991b: 1ff;），同紙は警官暴行事件と防御者たちの行動を詳報している。
2. 1969 年暴動の詳細よりもそれらの影響と意味付けのほうがより重要である。興味ある読者は，Mitchell（1992a），Rorabaugh （1989），Scheer（1969）などに，もっと詳しい記述を見出すであろう。
3. 1991 年 8 月暴動では，窓ガラスを割ったり掠奪したりした者たちの最初の標的は，テレグラフ通りにあるミラー商会の支店であった。ミラー商会はテレグラフ商業地区に拡張してきた最初の企業系列販売店の一つであった（Auchard 1991: 19）。
4. バークレーの対応は，「自由な」ホームレス反対運動を展開することだった。買物客や住民は，物乞いする人達に現金よりも 25 セントの商品引換券を渡すように要請された。その際，これらの商品引替券は食糧やクリーニング・サービスと交換されることがあったかも知れないし，アルコール類やタバコには使われなかったかも知れない。「私は我々が物乞いを止めさせることができるかどうか分からない。だが，我々は行儀のよい物乞いをする気にはさせるだろう。」と，バークレー・ダウンタウン連盟会長の Jeffrey Leiter 氏は言っている。シャタック通り沿の商人にとって，この企画の価値は，「本物のホームレスの人々を立証し，単にいんちきで　金をせびる路上人を嫌がらせて，彼らを追い出す助けとなるかもしれない」ということだった（Bishop 1991:A10）。この企画は今日，多くの他の都市でも真似られている。いずれにしろ，商品引替券は「援助に値する」貧乏人を「それに値しない」貧乏人から区別するだろうという希望が優勢であった。ダウンタウン舗装会社社長の Marylin Haas 氏は，商品引替券が「これらの人々（物乞い者たち）を退散させるかどうか」疑問視して，「私には分からない。しかし，これは価値ある試みであり，時期も適している」と語っている（George 1993: B4）。
5. 私は，公共空間の本質と目的に関しては２つ以上のもっと多くの見解があろうこと，そして多くの人々はそれらの間の中間の立場を取っている（そして多分，揺れ動いている）だろうことを認識している。しかし，これらは，後にみるように，いろいろな社会や時代を通して優勢な公共空間の見方である。私は後で，我々はこれらの見方を検討して，公共空間はこれらの弁証法的な相互関係を通して生み出されるものであることを理解し始めることができるのだと指摘する。
6. ルフェーヴル（Lefebvre 1991: 39）は，表象の空間は「その利用者に自然に体験される」と主張したが，彼の命題は十分な検討を拒みはしないだろう。人々は自分たちの空間を積極的に変え，それらを戦術を凝らして専横する（またはワザとそうしない）。
7. 少なくとも，これは領域の分割がいかに事実として存在するかのように想定されるかを示している。たとえ，実際にはこのような分割は正しくは決して存在しないのに。
8. 都市の公共の場に出た女性たちは，Wilson（1991）が指摘しているように，歴史的に，うさん臭い者とか売春婦・気違い，あるいは始末におえない者と見られてきた。しかし逆に，公共の場における女性の様式化された表現―バリケードのヒロインのような―が，しばしば，空間をめぐる政治闘争においてイデオロギー的に重要だったことも明らかである。
9. もちろん，このような権利を拡張することは，決して十分な政治的参加を保証することではなく，今なお不十分なままである。にも係わらず，多くの政治的・法律的な制度が作られて，公共圏において伝統的に排除されてきた多数の集団に権利を与えたり，少なくとも一層の政治的進展を支える梃子にしようとする必然的な動きがみられる。
10. このような空間の定義に対しては，電子メディアが現代民

主主義の公共空間の役割を果たすと考える人たちから異義が出されてきた。

11. Howell（1993: 314）の記述によると，「Arendt とハバーマスとの大きな違いは，…Arendt にとって公共空間は，例の公共圏と違って，地理的な意義を失っていない，というところにある。」

12. イギリス法学におけるホームレスの法律上の定義は，Ripton－Turner（1887）にまで遡れる。法律論議で市民権問題とホームレス性とがいかに相互に関連しているかのアメリカの事例が欲しければ，Commonwealth of Pennsylvania（ペンシルベニア州 1890）を参照されたい。

13. Will がニューヨークで称賛された Joyce Brown 事件に対するコメントを行って以降，このような態度が強まったことは確かである。これは，最近，ニューヨークやサンフランシスコ・ロスアンジェルスなどの自治体が行っているキャンペーンで大いに有効なことが明らかになったタイプのレトリックであることは間違いない。それはシアトルでみられるような新しい法律を制定させ，午前7時から午後9時までの間，歩道に座ったり横たわることを禁止している。それはサンフランシスコの議論，つまりホームレスの人々が現金自動預け払い機近辺に立つことを禁じる「防御区域」の規模をめぐる論争にまで波及した。都市の秩序の必要性を称揚するもっと最近の事例が必要なら，Leo（1994）を参照されたい。またニューヨークタイムズ紙（New York Times 1989b: A14; 1991b: B1; 1992a: 1. 40）も。

14. この Deutsche のコメントの末尾からの引用は，ブリティシュ・コロンビア州バンクーバー市の社会計画局記録からのもので，そこでは公共空間は 1 日 12 時間以上開かれていてアクセスできる場所と定義されている。このような解釈だと，公共区間は時間的次元も持つことになる。公共空間は閉鎖され得るのである。

15. また公共空間は，多くの都市では宗教活動の場所でもあった。しかしながら，アメリカの文脈でいえば，私的領域への宗教の公的な封じ込め，つまり世俗界からの分離は，宗教の役割が相対的に弱まってきたことを意味する。

16. 私は，社会的に作られた「差異」（主に社会的闘争の所産）と規制された多様性（主にデザインの所産）との違いを理解するのを助けていただいた Neil Smith 氏に感謝したい。

17. Wallace（1989）と比較されたい。彼は，歴史と社会のスペクタクルの場所への表象は，進歩と「民主主義」という企業的な概念の浸透とよく整合していると主張した。

18. MMG が称賛するものの中に含意されているナルシステックな力の強化の危険性に関する分析が欲しければ，Sennett（1992）を参照されたい。

19. 例えば，全国科学基金はネットワーク・アクセスポイントを地域的な電話会社に拠点化し始めたが，この企業は電子発信とデータ転送を独占し始めるかも知れない。我々が電子的「空間」を記述するために使っている，このようなメタファーは極めて重要である。公共空間というメタファーは市民権を意味している。他方，ハイウエーというメタファーは，規制と監視の必要性を示している。このメタファーは，市民権の問題を提起するよりも，車の運転と同様に，電子的コミュニケーションが一種の特別認可であることを示唆している。

20. Hershkovitz は，政治的抵抗運動は本来的に無場所的であるとする de Certeau（1984）の考えに異義を唱えている。de Certeau（1984: xix）によれば，支配的な権力が場所と空間を独占し，抵抗はその間隙においてのみ生じる，したがって抵抗運動には場所はないという。

21. もちろん，対話のための，あるいは日常生活のためのみの「安全な天国」を要望するという危険性がある。殊に，ホームレスの人々の場合には。民衆公園がホームレスという大衆の一部のオアシスとなってきた分，ホームレス性の社会的・政治的な生産をこれらの領域に封じ込める可能性が生じてきたのではなかろうか。それは確かに問題ではあろうが，Fraser（1991: 67）が指摘しているように，下位の反公共的空間の創造によって，政治的活動家たちは「１つの対話をずっと広範な舞台へと拡張すること」が可能となったのである。民衆公園のような場所は，広範な政治運動の立脚点になる（Mitchell 1992a）。

22. 1992 年 11 月，マイアミの裁判所は，Dade 郡はホームレスの人々にとって「安全な天国」を作ろうとしていると宣言した。これらの天国では，アルバイト労働者や物乞い者あるいは「ぶらぶらしている狼藉者」たちに対する警察の嫌がらせは，司法機関によって黙認されないだろう。この例のような裁判所によって秩序が維持されている公共空間の形成は，不法な人達に対して空間を閉じるという優勢な傾向と際立って対照的である（New York Times 1992b: A10; ホームレスの人々に対する公共空間の閉鎖について。同紙の 1989c: E5 の地図とレポート参照）。

23. Alameda 郡裁判所は，UC によって追求された永久的な命令に似た一時的なものを承認した。

文献

Auchard, E. 1991. How Did it Happen? A Protest Diary. *East Bay Express August* 9, 1991:1, 18-23.

Bishop, K. 1991. Vouchers Route Money to the Needy Separating Hustlers from the Homeless. *New York Times* July 26, 1991:A10.

Boudreau, J. 1991. The People Grudgingly Give In on Park. *Contra Costa Times* August 2, 1991 :A3

Boyer, C. 1992. Cities for Sale: Merchandising History at South Street Seaport. In *Variations on a Theme Park: The New American City and the End of Public Space*, ed.M.Sorkin, pp. 181-204. New York: Hill and Wang.

Calhoun, C. 1989. Tiananmen, Television and the Public Sphere: Internationalization of Culture and the Beijing Spring of 1989. *Public Culture* 2:54-71.

Carpignano, P.,Andersen, R.,Aronowitz, S., and Difazio, W.

1990. Chatter in the Age of Electronic Reproduction: Talk Television and the "Public Mind." *Social Text* 25/26:33-55.

Commonwealth of Pennsylvania. 1890. *General Report of the Commissioners Appointed to Revise and Codify the Laws Relating to the Relief, Care and Maintenance of the Poor in the Commonwealth of Pennsylvania*. Harrisburg: Meyer's Printing House.

Cornett, L. 1993. Beyond Open Space: Answers Come Hard. Boulder （Colorado） *Daily Camera* September 26, 1993:A9.

Crawford, M. 1992. The World in a Shopping Mall. In Variations on a Theme Park: *The New ,American City and the End of Public Space*, ed. M. Sorkin, pp. 3-30. New York: Hill and Wang.

Crilley, D. 1993. Megastructures and Urban Change: Aesthetics, Ideology and Design.. In *The Restless Urban Landscape*, ed. P. Knox, pp. 127-164. Englewood Cliffs, New Jersey: Prentice Hall.

Davis, M. 1990. *City of Quartz: Excavating the Future in Los Angeles*. London: Verso.

-----. 1992. Fortress Los Angeles: The Militarization of Urban Space. In *Variations on a Theme Park: The New American City and the End of Public Space*, ed. M. Sorkin, pp. 154-180. New York: Hill and Wang.

de Certeau, M. 1984. *The Practice of Everyday Life. Berkeley*: University of California Press.

Deutsche, R. 1990. Architecture of the Evicted. *Strategies: A Journal of Theory Culture and Politics* 3:159-183.

-----. 1992. Art and Public Space: Questions of Democracy. *Social Text* 33:34-53.

Dorgan, M. 1985. Hippies Moved from Street to Berkeley Dump. *San Jose Mercury-News* January 31, 1985:B12.

Dubofsky, M. 1988. *We Shall Be All: A History of the Industrial Workers of the World*, 2nd ed. Urbana: University of Illinois Press.

Firerite, R, and Wilson, Y. 1992. Intruder Slain at Home of UC Chancellor. *San Francisco Chronicle* August 26, 1992:A1, A11.

Foner, R 1965. *History of the Labor. Movement in the United States. Volume 4: The Industrial Workers of the World, 1905-1917*. New York: International Publishers.

Fraser, N. 1990. Rethinking the Public Sphere: A Contribution to Actually Existing Democracy. *Social Text* 25/26:56-79.

Garreau, J. 1991. *Edge City: Life on the New Frontier*. New York: Doubleday.

George, M. 1993. Handout Coupons May Foil Begging for Booze, Smokes. *Denver Post* March 2, 1993 :B4.

Glazer, N. 1992. "Subverting the Context": Public and Space and Public Design. *Public Interest* 109:3-21.

Goss, J. 1992. Modernity and Postmodernity in the Retail Landscape. In *Inventing Places*, ed. K. Anderson and R Gale, pp. 159-177. Melbourne: Longman Scientific.

-----. 1993. The "Magic of the Mall": An Analysis of Form, Function, and Meaning in the Retail Built Environment. *Annals of the Association of American Geographers* 83:18-47.

Greenberg, K. 1990. The Would-Be Science and Art of Making Public Spaces. *Architecture et Comportment /Architecture and Behaviour* 6:323-338.

Habermas, J. 1989. *The Structural Transformation of the Public Sphere: An Inquiry into a Category*, trans. T. Burger with F. Lawrence. Cambridge, Massachusetts: MIT Press.

Harris, B. 1988. Homeless and their Neighbors. *Oakland Tribune February* 22, 1988:B12.

Hartley, J. 1992. *The Politics of Pictures: The Creation of the Public in the Age of Popular Media*. London: Routledge.

Harvey, D. 1989. *The Condition of Postmodernity: An Enquiry into the Origins of Social Change*. Oxford: Basil Blackwell

-----. 1992. Social Justice, Postmodernism and the City. *International Journal of Urban and Regional Research* 16:588-601.

-----. 1993. From Space to Place and Back Again: Reflections on the Condition of Postmodernity. In *Mapping the Futures: Local Cultures Global Change*, ed. J. Bird, B. Curtis, T. Putnam, G.Robertson, and L. Tickher, pp. 3-29. London:Routledge.

Hershkovitz, L. 1993. Tiananmen Square and the Politics of Place. *Political Geography* 12:395-420.

Hillis, K. 1994. The Virtue of Becoming a No-Body. *Ecumene* 1:177-196.

Howell, P. 1993. Public Space and the Public Sphere: Political Theory and the Historical Geography of Modernity. *Environment and Planning D: Society and Space* 11:303-322.

Kahn, B. 1991a. People,s Park'Is the Fight Over? *East Bay Express March* 22, 1991:2, 28.

----- 1991b. Activists and Homeless Haggle Over Future of People's Park. *East Bay Express* June 14, 1991:3, 29-30.

-----. 1991c. Who's In Charge Here? University Bulldozer Rolls While Council is Out of Town. *East Bay Express* August 9, 1991:1, 11-13.

Koopman, J. 1991. People's Park Protestors Brace for Today. *Contra Costa Times* August 3, 1991:A1, A13.

Kowinski, W. 1985. *The Mailing of America: An Inside Look at the Great Consumer Paradise*. New York: William Morrow. .

Lefebvre, H. 1991. *The Production of Space*, trans. D. Nicholson-Smith. Oxford: Basil Blackwell.

Leo, J. 1994. Cities Finally Acting to Restore Public Order. Syndicated Column, Universal Press.

Levine, H. 1987. Homeless Shelter Closes. *San Francisco Examiner* May 11, 1987:C1.

Los Angeles Times 1988. Eviction of Homeless in Berkeley Sparks Melee. March 17, 1988:13

-----. 1989a. Rally at Berkeley Erupts into Riot. May 21, 1989:l3.

-----. 1989b. S.F. Clears Park's Tent City of Structures, Not People. July 21, 1989:l3.

-----. 1990. Compassion for the Homeless Wearing Thin in Bay Area. July 20, 1990:A1.

-----. 1991a. Berkeley Bastion. March 13, 1991:A3.

-----. 1991b. Temper Tantrums Over Dystopian Nightmare. August 7, 1991:A10.

-----. 1992. Play Replaces Protest at People's Park. March 31, 1992:A3

Lowenthal, D. 1985. *The Past is a Foreign Country*. Cambridge: Cambridge University Press.

Lyford, J. 1982. *The Berkeley Archipelago*. Chicago: Regnery Gateway.

Lynch, A. 1991a. Council Recess Adds to "People's Park" Woes. San Francisco Chronicle August 6, 1991:B1.

-----. 1991b. What They're Saying About People's Park. San Francisco Chronicle August 7, 1991 :A11-A12.

-----. 1991c. Police Arrest Protestors at New Volleyball Courts. San Francisco Chronicle August 9, 1991:1, 20.

Lynch A., and Dietz, D. 1991. Fewer Recruits for People' Park Wars. San Francisco Chronicle August 2, 1991:A1, A20.

Mair, A. 1986. The Homeless and the Post-Industrial City. Political Geography Quarterly 5:351-368.

Marcuse, P. 1988. Neutralizing Homelessness. Socialist Review 18:69-96.

Marston, S. 1990. Who are "The People": Gender, Citizenship, and the Making of the American Nation. Environment and Planning D: Society and Space 8:449-458.

May, M. 1993. Telegraph Ave. Shoppers Report Retail Revival. The Bay Guardian January 9, 1993:9.

Mitchell, D. 1992a. Iconography and Locational Conflict from the Underside: Free Speech, People's Park and the Politics of Homelessness in Berkeley, California. Political Geography 11:152 169.

-----. 1992b. Land and Labor: Worker Resistance and the Production of Landscape in Agricultural California Before World War II. Unpublished PhD Dissertation, Department of Geography, Rutgers University.

Morgan, E. 1988. Inventing the People: The Rise of Popular Sovereignty in England and America New York: W.W. Norton. Naughton, E. 1992 Is Cyberspace a Public Forum? Computer Bulletin Boards and State Action. The Georgetown Law Journal 81:409-441.

New York Times. 1988a. A Playground Derelicts Can't Enter. August 20, 1988:A31.

-----. 1988b. 29 Trying to Feed Homeless are Arrested in San Francisco. August 30, 1988:A14.

-----. 1989a. Violence Flares at Berkeley Park During Event Marking 60's Battle. May 21, 1989:1.26.

-----. 1989b. New Message to the Homeless: Get Out. August 3, 1989:A14.

-----. 1989c. For the Homeless Public Spaces Are Growing Smaller. October 1, 1989:E5.

-----. 1991a. Deal is Struck on Fate of Park and Protest Site. March 10, 1991:1.39.

-----. 1991b. The Public's Right to Put a Padlock on Public Space. June 3, 1991:B1.

-----. 1991c. Idealism to Decay to Volleyball at People's Park. July 5. 1991:A8.

-----. 1992a. Trial to Be a Test on Homeless Living in Parks. June 14, 1992:1.40.

-----. 1992b. Judge Orders "Safe Zones" for Homeless. November 18, 1992:A10.

Ripton-Turner, C. 1887. A History of Vagrants and Vagrancy and Beggars and Begging, London: Chapman Hill.

Rivlin, G. 1991a. People's Park: Construction Zone. East Bay Express August 2, 1991:3, 27.

-----. 1991b. Appropriate Force? Reports of Police Inflicted Injuries Continue to Flow In. East Bay Express August 9, 1991:1, 13-18.

Roberts, C. 1994. Girding the Globe: The Boundaries Between People and Countries are Being Erased by Telecommunications. Boulder（Colorado）Daily Camera February 10, 1994:C1.

Rorabaugh, W. 1989. Berkeley at War: The 1960s. New York: Oxford University Press.

Ruddick, S. 1990. Heterotopias of the Homeless: Strategies and Tactics of Placemaking in Los Angeles. Strategies: A Journal of Theory Culture, and Politics 3:184-201.

Scarpaci, J., and Frazier, L. 1993. State Terror:'ldeology, Protest and the Gendering of Landscapes. Progress in Human Geography 17:1-21.

Scheer, R. 1969. The Dialectics of Confrontation: Who Ripped Off the Park? Ramparts 8 （August）:42-53.

Schlachter, E. 1993. Cyberspace, the Free Market and the Free Market Place of Ideas: Recognizing Differences in Computer Board Functions. Hastings Communications

and Entertainment Law Journal 16:87-150.

Sennett, R. 1992. The Fall of Public Man. New York: W.W. Norton.

Smith, N. 1989. Tompkins Square Park. The Portable Lower East Side 6（2）:1-28.

-----. 1992a. Contours of a Spatialized Politics: Homeless Vehicles and the Production of Geographical Scale. Social Text 33:55-81

-----. 1992b. New City, New Frontier: The Lower East Side as Wild, Wild West. In Variations on a Theme Park: The New American City and the End of Public Space, ed. M. Sorkin, pp. 61-93. New York: Hill and Wang.

-----. 1993. Homeless / GIobal Scaling Places. In Mapping the Futures: Local Cultures Global Change, ed. J. Bird, B. Curtis, T. Putnam, G.Robertson, and L.Tickner, pp. 87-119. London Routledge.

Snider, A. 1992. Intruder Slain in House of UC Chief. Contra Costa Times August 26, 1992:A1, A12.

Sorkin, M., ed. 1992. Variations on a Theme Park: The New American City and the End of Public Space. New York: Hill and Wang.

Stallone, S. 1993. People's Park Protestor Sues UC Over Search. The Bay Guardian January 6, 1993:9.

Stern, S. 1987. Activists Seek a Solution Beyondi Shelters. Oakland Tribune February 22, 1987:D10.

Vaness, A. 1993. Neither Homed nor Homeless: Contested Definitions and the Personal Worlds of the Poor. Political Geography 12:319-340

Wallace, M. 1989. Mickey Mouse History: Portraying the Past at Disney World. In History Museums in the United States: A Critical Assessment, ed. W. Leon and R. Rosenzweig, pp. 158-180. Urbana: University of Illinois Press.

Will, G. 1987. Living on the Street: Mentally III Homeless Contribute to Community Decay. Syndicated Column, Washington Post Writer's Group.

Wilson, A. 1992. The Culture of Nature: North American Landscape from Disney to the Exxon Valdez. Oxford: Basil Blackwell.

Wilson, E. 1991. The Sphinx and the City: Urban Life, the Control of Disorder, and Women. Berkeley: University of California Press.

Young, I. 1990. Justice and the Politics of Difference. Princeton,. New Jersey: Princeton University Press.

Zukin, S. 1991. Landscapes of Power: From Detroit to Disney World. Berkeley: University of California Press.

監訳者（浜谷正人）の謝辞

この翻訳は富山大学人文学部人文地理学コースの学部生との共訳である。参加者の氏名を記して謝意に代えたい。（順不同，敬称略）

高橋美幸，坂井冬紀子，山崎宏幸，奥村真樹子，山田峰樹，追分晴名，石上雄基，小山武司，羽生 浩，大橋正浩，影山和美，古田佳苗，小幡真子